

## 古代日本の曆に就て (3)

## S · I 生

貞享二年(皇紀2345), 保井春海は日本長曆を編纂して, 其の序文に於て, 次の通り, “三天曆” の存在を認めて居る。即ち

『我國神代に, 伊弉諾尊, 日の三天を測り給ひ, 春秋を考へ, 歳時を定め給ふと雖も, 其の詳なること, 得て聞く可からざるなり。』

と書いてある。

又, 寶曆四年(皇紀2414), 陰陽頭天文博士安倍泰邦が, 敕を奉じて撰した曆法新書にも

『本邦太古に三天曆法有り。三筒に表象して, 以て, 日の三天を測り, 春秋を考へ, 歳月を定む。』

と見えて居る。

又, 曆法新書に, 『三筒に表象して, 日の三天を測る』と云つて居るのについて, 更に安倍泰邦は説明を附加して居る。夫れは, 古事記にも載つて居る伊弉諾尊(陽神), 伊弉冉尊(陰神)の兩神が, 淡路の淡能基呂島に天降り給ひ, 天の御柱を御立てになり, 『汝は右より廻り逢へ, 我は左より廻り逢はむ』と, 伊弉諾尊が仰せられ, 御自身は左より, 伊弉冉尊は右より, 御廻りになつたと云ふ神話に據るもので, 此の話は, 即ち, 太陽は常に左旋し, 太陰即ち月は常に右旋することを表して居ると云ふのである。所謂“合朔”の理があることが知られると云ふ。又, 伊弉諾尊が, 黄泉の國から御逃げ歸りになり, 筑紫日向の橘の小門の阿波岐原で禊祓ひし給ふた時に, 底筒之男命, 中筒之男命, 上筒之男命の三神が生れ給ふたことが, 矢張り, 古事記に載つて居るが, 泰邦は, 底筒之男命の御名の“底”は“下”と云ふ意味で, 冬至の日道と見做し, 中筒之男命の“中”は“平分”と云ふ意味であるから, 春秋二分の日道とし, 上筒之男命の“上”は“夏至の日道”と解して, 之を“日道の三天”と稱して居る。なかなか穿つた説であると思ふが, 容易に賛成出来ない。『先儒之を日道の三天と謂ふ』と述べてあるから, 泰邦自身の説ではない様である。多分, 前掲の保井春海の日本長曆の序文を指したものかと思ふが, 春海の高弟谷泰山(皇紀2323—2378)は, 壬癸録の中に, 『貞享曆の序。伊弉諾尊三天を議して以て年を立て給ふ。神武の御宇の時, 始めて時を定めて, 以て月を序し昼影に隨つて文教を布き給ふ。共に日本書紀に見えたり。此れ當道の大事。當に口訣を受くべく, 忽にすべからざるなり。』と云つて居るから, 或は此の谷泰山の記事を指したのかも知れない。

因に、上筒之男命、中筒之男命、底筒之男命の三神の“筒”と云ふ意味は、<sup>ほつづ</sup>長庚即ち金星の「つゝ」に當り、星と云ふことになると云ふ説がある。此の三神は住吉神社の御祭神であり、航海漁業の守護神として、各地の港にて御祭りして居る。之を思ふと、上代に於て航海の針路を定めるのに太陽の高度、星の高度を用ひたことが想像出来るのであつて、今日の天文航法にも類した航海方法が存在したものと推定出来ることは、全く驚異である。なほ承平年中（皇紀1591—1598）に編纂せられた分類體の和漢辭書である倭名類聚抄に、<sup>ほつづ</sup>長庚のことが見えて居るから、参考の爲めに附記する。

『大白星一名長庚、<sup>ほつづ</sup>由布都々、暮に西に見ゆ』云々。

それから、前述した天の御柱は、<sup>あめ</sup>杵儀、即ち棒を立て、日の高低を測る土圭（支那で呼んだ名稱）と解釋出来ぬことはない。斯う考へて來ると、神代の文化も相當高度のものであつたと推測されて來るのである。今日迄、發掘せられた上代の遺物に、劔があり、鏡があり、玉があり、銅鐸があり、様々の彫刻が施されてある土器などがあり、又、衣服を織り、農耕、漁業に従事したことが記紀に載つて居ることを合せ考へると、或は、さもあらんと頷かれるのである。

然し、三天曆と云ふ言葉は、新しい名稱であるらしく、只今の處では、保井春海の日本長曆の序文の記事より以前には遡り得ないのである。谷泰山の記事に、三天のことが日本書紀に載つてあるものゝ様に記されて居るが、三天曆のことは古事記にも日本書紀にも記載せられて居ない。

要するに、既に上に述べた様に、我國には、神代の昔から、“三天曆”と云ふ曆があつたと云はれて居り、此の三天曆は、皇祖伊弉諾尊が定められたと傳へられて居るが、然し、それが果して我國古代に於て三天曆と云ふ名があつたものか、或は、後世に至つて、何人かゞ命名したものであるか、又、何んな形式の曆であつたかは、遺憾ながら、詳かでないのである。

あの有名な國學者本居宣長（皇紀2390—2461）の著作である眞曆考の解釋では、天地のはじめの時から空の月によると日と、空の月による月と、季節の交替による年と、此の三つは自然に備つて居たもので、『もろこしの國などのごと、人の巧みて作れるにあらざれば、八百萬千萬年を経ゆけども、いさゝかもたがふふしなく、あらたむるいたづきもなき、たふとき、めでたき眞の曆には有ける。』と云つて居る。

筆者も、神代の昔より我國に曆が存在したことを信ずるものである。三筒に表象して、日の三天を測つたことは、疑問として、今暫く措くこととするが、神代に於て、既に、日月歳の三つの時間的計算方法が用ひられたことは、推測し得られるのである。（つゞく）